

小梅日記弘化五年の条 (三)

藤田貞一郎

一 はじめに
二 史料

一 はじめに

「ホメロスは、しかしながら、全体的真実を語ることのほうを好んだのである。どれほど仲間のむごたらしい死に目に会った者でも物を食べなければならぬこと、空腹は悲しみよりも強く空腹を満たすことは涙にさえ先き立つものであることを、かれは知っていた。くろうとは、たとえ友だちが食われてしまったばかりであり、腕のみせどころといってもただ夕飯をこ

しらえるにすぎないような場合ですら、くろうとらしくふるまうものでありその腕前に満足を覚えるものがあることを知っていた。腹がくちくになると（そして腹がくちくなる時はじめて）人間は悲しむゆとりが出てくるものであること、夕食後の悲しみは贅沢に近いものであることを知っていた。そして最後に、ちょうど空腹が悲しみに先き立つように、疲れは、悲しみにつづいて来て、悲しみの流れを断ち切り死別の悲しみを忘れさせてくれるだけにそれだけいっそう甘美な眠りのなかに悲しみを消しきってくれるものであることを知っていた。要するに、ホメロスはこの主題を悲劇

的にとり扱おうとはしなかったのである。「全体的眞実」を語るほうを好んだのである。」(A・ハクスリー著、西村孝次訳『思想の遍歴』六〇七頁、東京創元社、一九六〇年)

『同志社商学』第二十六卷第二号ならびに第三号に掲載したものに引き続き、今回は弘化五年九月朔日から十二月晦日までの四カ月間の日記を印刷に付する。

これで、小梅日記弘化五年の条は終りとなる。これに続くのが、最近、志賀裕春・村田静子両氏の校訂により公刊された『小梅日記1 幕末・明治を紀州に生きる』(東洋文庫二五六、平凡社、一九七四年)に所収の嘉永二年の日記である。

貴重な紙面を借りて、これまでほとんど名も知れなかった人物の日記を解説紹介して来た理由は、冒頭に引用したA・ハクスリーの言葉につきてゐる。地球上に生息する生物のひとつにすぎない人間の歴史は、これまであまりにも事件や状態を中心に構成されすぎて来た嫌いがある。ここに、柳田国男の概念を借りてい

えば、『不幸なる芸術』一八〇三五頁、筑摩叢書八三、筑摩書房、一九六七年) ウソとイッハリの区別も出来ない歴史小説家による人間の歴史が創作されるのであり、また人々の多くが歴史小説を待望することになる。こうした問題点に早くから気づき、これを是正しようとしたすぐれた業績にアイリーン・パウア著、三好洋子訳『中世に生きる人々』(東京大学出版会、一九五四年)がある。

アイリーン・パウアが使用した資料は、家事に関する教訓書、家族間の書翰集その他様々であるが、日記は生きた人間の労働や感情すなわち人間の歴史の全体的眞実を把握するのには、欠くべからざる資料である。この意味で、今後とも、われわれは、地道に日記の発掘作業を積みあげていくことが必要であろう。もとより、この発掘作業は無闇矢鱈に行なえばいいという筋合いのものではない。それには、当然一定の基準が考えられねばならない。が、今の私には、絶対不変の命題に類するような基準が、まだ十分に把握できて

いるわけではない。当面の作業を推進するに当って、差し当りの基準としたのは、一刻たりとも霞を食っていては生きていけない生物としての人間の日常生活を記述した家事日記をとにかくも発掘する要があるという自己流の考えであつた。すなわち、家計をあずかる主婦日記の発掘の要である。

こうした考えに従つて解読して来た小梅日記を通して、われわれは、武士は食わねど高楊子式の印象とはいささか異なつた実態をも知ることが出来たのである。また、小梅の酒好きは、これまでに紹介した部分にも度々窺われたところであつたが、十二月二十九日の大晦日には、「大ニ世話し」のため、亭主や跡取息子の岩一郎が正月の「かひ物」に出かけていることが記されており、単純な男尊女卑の歴史観では律しきれない徳川期の生活の実態が息づいている。

われわれの目指す目標は、まだまだはるか遠くにそびえていて、なかなかわれわれの射程距離には入って来ない。が、最近、小梅日記よりもさらに時代を遡る

寛政期和歌山城下町商人の主婦日記が公刊されることを知った。近刊予定の『和歌山市史、史料編、近世史料1』第五卷に所収の「日知録」がそれである。したがって、日本最古の主婦日記の称は、この沼野家の日記に譲らねばならない。こうして、次から次へと発掘作業を続けるうちに、われわれは、アイリーン・パウアにならつていえば、いつの日か、『徳川時代に生きる人々』を著すことが出来るようになるであろう。

(一九七四年十二月一日)

〔附記〕 今回の部分の解読に当たつても、神戸女学院大学三木俊秋教授のご教示を受けた部分がある。記して謝意を表する。もとよりあり得べき誤読は藤田の責任である。

二 史料

○九月朔日。朝六ツク起て八幡へ参る。岩一郎・藤四郎殿・千太郎同道。昼前藤助との来らる。きのふノ事也。酒出し、昼まま出し、しばらく休みて七

ツ過帰らる。○黒江ノこりへ来る。そうめん一膳たへて帰る。○安兵へ来てはたらく、種まき。今朝川嶋丈節ノ悴一之丞病死知らせ来る。夕方権七ヲやりし処明晩ノよし也。池田ノ清衛七ツ比病死ノよし也。甚左衛門又わるしと言。七ツや行、かれはセわ。

○二日。くもる。昼後ろ池田へ悔ニ行、又岩橋へ行ニ付、宿ノ会いかかと思所へ野呂来るゆへ、会ハ同人江頼む。酒出ス。夕方浅之助来る。同一盃呑。野呂ハ池田へ見廻ニ行。今晚送葬ゆへ見立ニ岩一郎行、川嶋へハふ行。主人四ツ過帰る。岩はしろ又田中九右衛門方へ行候よし。酒呑帰る。

●三日。五ツ過ろ岩橋へ田中へ行。咄し事ニ付行けいこ休す。岩一郎・竹処。有田垣谷安右衛門ろ状来る。銀式奴看代此度結構ノ悦として送らる。夕方老奴ニ而やきはせ求。野口ヘマ。

○四日。快晴ス。昼前ろ主人山本彦十郎殿へ侍ころノ箱持参。八ツ過帰り休まんとする処へ九右衛門殿

来る。すし一鉢木本やより持参。是ハ九右衛門心得ノすし。此方ろどちらやう汁魚久ニ而求、代不知。夕方ちやうちん持帰る。昼前、岩一郎野呂へ行。又浅之助方へ行。扇子ノ画出来て持帰る。○権七ニ赤かねくわんす并やきなべ筒やへもたせ遣ス。六匁五分ト六分也。○表具師ニ而箱取来る。又帯伊ニ而図請取来ル。代拾奴。○野上やニ而酒取来る。○池田へ香儀之酒券一持参。又あちろ赤ま持参ス。外ろもらひしすそわけこんやへ持参。

●五日。ぬか雨降。池田至極むつかしきゆへ野口ニ見せんと存候。宅ハいつれニ候哉と尋ねニ来る。昼後主人見廻ニ行。母君も同前かたくり少持参。岩橋へ権七ヲ遣ス。合羽かへし袴とてくる。左氏ノ会ゆへ人々来る。但くり山、さつ川、山本、善之助共也。省太郎ハ先へ帰る。妻女ノ(不明)佐々木結構ノよし也。三人江酒出ス。どちらやう汁こしらへ。

池田ろすしくれる。夕方善之助帰る。ちやうちんかす。下駄も同前。

○六日。少くもる。昼後藤助殿くる。跡を魚久が看

二色持参。どぢやう汁たく。又野呂来る。同座。

酒一升万二郎ヲ頼ミ泉屋ニ而取来る。六尺河野方

ノ状持参。夜大ニ雨降。遠く雷鳴ニ驚入。

○大ニ快晴ス。今日ハ 大納言様岡ノ宮へ御参詣又

八幡へも御参詣朝五ツ時ノよし。会ニ而人々来

る。三人程也。今日ハ誰も不来、安兵へニ酒吞セ

しのミ也。藤四郎とのる書付受取。夕方。

○八日。大ニさむし。快晴。早朝御貸方筋百三拾目ヲ

はし丁なべ屋ニ而受取来り、早速五拾七匁六りガ

ンキ丁梅本へもたせ遣し、跡も夫々江弘。学校当

番也。昼前、楠本屋久兵衛来る。酒出ス。魚九ニ

而看取来ル。又二ツ取。是ハ甚左衛門大病ゆへ見

廻ニ遣ス。昨日有馬ニ見せし処一両日中ニハとて

ももたずとの事。鳥井浦を下すし一樽送らる。忠

左衛門来る。外を貰ひし由ニ而マンヂウ七ツ先程

のうつりへ入て持参。親余ほと様子悪敷しと云。

○九日。天気よし。少くもる。登城権七供。田中へ

主人寄。権七先へかへる。野呂来る。其内酒井省

安来る。柿持参。扱娘事も兼々御懇意ニ仰被下候

か此度馬つぎ利助と申質米や致候者へ縁組いたし

来春送り候筈、此節大ニ急き十二日引越候筈ニ

候。しかし当時ノ事ゆへ客來杯ハ法度ノ事ゆへよ

め入かましき風ニ而も悪敷、草りへもひも付て用

事ニつくり来る様ニとの事。とし四十余ノ人ニ候

間ふんべつも定り、おもやも取立ててつかへる処

ハなく夫婦斗也。先妻ハ死候よし也。先案心致候

間右之段御知らせ申也とて直ニ帰る。酒ヲ出しカ

け候へ共帰る。野呂ニ出候内善之助来る。忍冬酒

求ニ来候ニ付御寄申也と言。先御上り被成いたき

候ハハ酒ハ権七ニもたせ上へしとて、外ノ用も有

ゆへ権七ヲヤル。かちの栗五ツ、柿十一もたせヤ

る。忠左衛門来る。親もついニハ養生不叶今日昼

頃病死との事。夕方、喜多村ノ娘来、誰も外ニハ

無之ニ付おちめなげく、御出被下よとの事、小梅

ハ断、主人斗行。

●十日。ぬか雨降。小梅画書。ふ出来。主人池田へ悔ニ行。今晚かりこつめのよし也。見立ニ行。

○十一日。はきとせし天氣ニハあらず。今日ハ八幡ニ馬かけ有之。先月ハ水つきニ而今日にのびたるよし也。主人着かひニ行。干かごも求。小梅此間四五日ハ頼れたる画書なやむ。何事もせず。母君も同様哥書。右河野左近此中比京都へ登り双林寺ニ常画会有之よし也。序ニ泉式部と言寺有。夫ニ軒端の梅ノ古木有。今日無下ニさかしき地となりたるよし也。扱其寺ノ住僧ハ当地ノ産ニ而かねて申ニハ我国ノ人々ヲ知度候間何卒書ニ而も画哥ニても書てくれよとの頼のよしゆへ母君も哥書遣ス筈。主人へも頼候へ共不書ゆへ兩人ノヲ遣筈。未

来。
こととはむ軒端ノ梅に植て見し人にいく春香を手向けん

同しく

小梅

田中氏を使来。本八卷十七、十八、十九、廿、廿

(TAD) 一合六さつかへしニよこさる。又、其次廿二、廿三、廿四、廿五と四本渡ス。廿六さつ尋候へ共一向不見。夜松下へ小ふすま岩一郎持行。母君さきの森へ参詣して三丁め直川やノ母ヲ見廻。此間中鶴乱ノよし。

●十二日。評定所当番四ツ比る出ル。八ツ前迄かかる。歸りて休間もなく会ニ而人々来る。平山、鈴木、左内、千太郎等也。夕方、鈴木芳右衛門来る。酒出ス。榎本清助病氣ノ処大分よきとの事。

●十三日。しよぼく雨降。八ツ比る省太郎佐氏写シニ来ル。富永不来。七ツ過北野奎右衛門来る。さしつかへなく候ハハ市川同道ニ而今晚咄シニ来らんと云。さしつかへなく候間御出と云。夕方来る。酒壺徳り、すし一鉢持参。市川おそきゆへ岩一郎よひニ行。妻ノ母病氣ゆへ見廻ニ行ゆへとて断。しはらく有て来り是から見廻ニ参候。あまり失礼ゆへ御断ニ参上と云。先一盃吞て御出被成とてとめる。一二盃吞て直ニ帰る。四ツ比帰る。省

太郎ハ先へいぬ。永沢衛門ノ書状ノぬき書哥も有是を十六文ツツニ而求るよし也。大風ニ而瓦木ノ葉の如くちると言文有よしにて哥ハ

流レくるそま木ノウへを枕にてかへらの上に月をミる哉

と言哥也。かく別秀哥とも思はず。母君ノ哥。

○十四日。快晴ス。ふき二枚打張。主人ハゆづりノ処ノ書ヲかく。八ツ比持参ス。留主中左内来て待るる処へ七ツ比帰ると直ニ書ヲかく。其わけハ白井ノ出入ノ男立蔵と云者ハ元来ひこの国やつしろノ産也。永く此国ニ住居子供兩人。男子ハつれ子ニ而出家ニ成、女子へむこ取児うミしか、養子ならず者ゆへ此度別レ娘ハつれて国へ帰るよし、学校江寄候処貴志其由申、酒出し書ヲ一枚書遣しくれよとの事ニ而其席ニ而認候へ共不出来ゆへ、書直し今晩きしが取ニくるとの事。則五ツ過來るゆへ渡ス。其節お重来る。此間中三丁めノ母かくらんゆへかいほうニ行、今晚帰候也。扱藤助殿も主人

とつれて入来り、岩橋左内ニおしへて遣さる。扱一盃出ス。三ツ鉢同人持参ス。跡から久家ノ丁松屋も来る。つれ立て又いづ方へか行。かの松屋か哥。

立かれし竹の林の桜花千代の影とも頼まれぬ世哉

其節いけ田ヲすし少々くれる。直ニ出ス。主人米与へ行。金借用ノ為○米つきする。岩一郎。

○十五日。快晴めつら數天氣也。今日ハ佐氏ノ会ニ而山本、札川来ル。跡ニ而酒出ス筈、池田ノ内室病氣ゆへ遠慮する。夜主人行。昼前塚山画取ニ来る。河野へ子息ヲ同道す。小画ノ菊、母君ノ哥、小梅哥合三枚渡ス。田中善之助も不来。すしつけて有之候へ共不遣。酒式升取右ヲ池田へ送る。

○十六日。快晴。今日ハ舟行。北野左右衛門万受込也。小梅河野ヲ頼れたる画書。全紙へ菊いばら添。田中ヲ使ニ重助来る。本かへしニ来り又かす。後かん書三さつ持参。其次廿六かミへす廿

七、廿八、廿九、三十、三十一、三十二と三十三と渡ス七さつ也。一盃出ス。しはらく咄ス○ミそつき。今朝米又ヨリ豆三升持参ス。大てい八十文かへ位。画塚山へ権七ヲもたせ遣ス。坂本やニ而唐幣七枚取。直不知。夜月色よし。夕方過帰る。はセ廿斗つる。

●十七日。御祭礼ゆへ休ミ。市川齋来る。詩直しくれよとの事。直ニ帰る。よし田法輪寺来る。本よむ。池田送葬。堀つめ迄岩一郎ト権七ト送る。藤四郎とのいか式はい持参りくれる。主人ハ池田迄。夕方前一盃呑処へ山中ちく後守殿用人来る。其用ハ子息江素どくおしへてくれよとの事。則受合十九日昼後々行管ニ約束ス。其使ハ直ニ帰る。又跡々遠藤一郎ヲ手舂来。右ハ御咄し之一条申置候処いつれ先生へ御頼申由ニ付此事申上度候へ共かつ気ニ而痛つよく一步も歩行出来かたきよし也。則山中筋也。又夜前も白井大二郎来り山中ニ申ニハ子息へ素とくおしへもらひ度誰等かよく哉

と申候ニ付先生ノ事ヲ申置候ニ付使者参候もしれす御心得被成よとの事也。使者ノ名秋田和太郎也。

●十八日。御上使也。八ッ比帰らる。名加藤伊与守^(マサ)三千石ノよし。会ニ而富永、山本来る。酒出ス。安兵へ来り木割。同人ニ酒取ニやる。山中ノ家来秋田和太郎ヲ手舂来る。当廿九日ヲ来てはしとの事也。今朝ハ遠藤一郎宅へ行。昼前白井ノ長屋ニ久敷いたる立蔵来る。此度生国ひこへ帰るよしニ而書画ヲ求しゆへ此間主人書ヲ書てやり、もはや帰りし事と思居たるが、おととひ出立したれとも天氣合ニ而かたニ風待いたるゆへ御いとま乞ニ参上と云ゆへ又画三、哥二遣ス。直ニ帰。

●十九日。夕方々大雨。夜ハ遠く雷鳴ス。昼ノ内天氣よし。権七ヲ小桜や、いさかやへ遣ス。野呂清吉ヲも見廻ニ遣ス。直覚へももめん取ニやる。西光寺新ばち悦ニとて酒酒^(マ)一持参。小梅菊鳥紙へ書。有田々状来。夜藤四郎との夫婦来ル。酒出ス。長

坂の小鯛二送らる。

○廿日。快晴ス。染物ス。大ニセわしく。学校文会ニ而行。直さま榎本へ行、夕方帰り又池田貞信院初七日たいやゆへ参詣ス。直ニ帰る。浅之助来て居て、藤四郎も来る。家事ノ相談、酒一ツ出ス。何もなし。四ツ前帰らる。風呂敷染る。安兵へ来り大小袴かす。此節いつ方ニも病氣。今晚ハ宮沢ノ隠居死送礼也。利病者かつけニ而大かたあしく。

○廿一日。快晴。茶ノ子寺其外へくはる。来ル廿四日ハ厚信院様廿五回忌ゆへ随円院様来年ハ五十回忌ゆへ取越て一所ニする。寺へ十枚ト八枚ト四枚ハ塔婆料茶ノ子一重と上ル。其外松下、喜多村、鈴木、両梅本へ送る也。権七行。楠木屋紙持参して書くれよとの事。酒一ツ出ス。岩橋左内ぐれ五ツくれる。夫ヲ肴ニセシのミ。松たけ肴斤斗求。夫の野呂清吉も来ル。打つれて野辺へ行。夕方楠木屋ニ而酒呑帰る。留主中岩橋藤助との来る。酒取ニやり、ぐれ肴ツやく。滝本源三郎も来る。十匁

九分餅飯七升つき賃共。七軒ぶり。

○廿弐日。昼前藤助との来る。かつを造身一鉢持参ス。同人ト林敬二郎と学校ニ而振廻ゆへ岩一郎もよばれけれ共用事有之不行。宝祥院本人ニ(マ)而來。此度願之通相濟三拾石程ツツ入。又ふしんノ金三千兩下りしとて礼ニ来る。夫ゆへ帰山致筈なれ共今しばらくととまり居るとの事。肴廿一台へつミ持参ス。直ニ帰る。夫の月代して学校江出ル。夜母君さきの森へ参り松下へ寄。扱肴三ツ内田善助へ出産ノ悦ニ送る。小いち一、赤魚弐也。野呂清吉庭迄来る。安兵へ娘箱持参ス。梅本の茶くれる。岩一郎夜米つく。

○廿三日。快晴ス。大ニセわしく。雑谷(感)たき。天井ふく。主人正住寺へ行。明日来てくれと云。鈴木、喜多村、松下の香奩并たらバ料。夫と江備へる。夕方富之助来。藤四郎夜前はいこしらへくれる。今晚主人と岩とよばれる。権七ヲ伊勢や江遣ス。

○廿四日。快晴ス。今日ハ厚信院様廿五回忌ゆへ隨円院様ハ四十九年ゆへ取越て一所ニ法事相勤むる。

ハツ半時る正住寺ヲもまねく。弟子つれて来る。

妙宝寺同様。其外松下彦右衛門殿、久よ、鈴木芳

右衛門、芳太郎、隠居、喜多村半右衛門、梅本家

内、浅之助、藤助、志賀ハ忌明礼ニ来一所ニめし

酒出ス。同座。法照寺義観ハ北町へ来りしゆへ幸

也とて寄。客十九人也。富之助朝から来り料理、

小梅庭廻り、権七同様。千太郎、万二郎も手つた

ふ。しかし手たらす大ニセわしく、こせうなく相

濟。九ツ比ねる。正住寺も備へ物有。此方ハ八

匁、弟子へ式匁、惣入用。客廿人。

十匁九分 餅や 四匁 塔婆料 十一匁 布施

十匁 厚信院様 八匁 隨円院様 十匁程 かひ

物酒四升 惣入用七拾目程也。

●廿五日。夜前ハ降。傘下駄ニ而寺参り。雨天ゆへ母

君ハ不行。しかし段々よき天氣ニ成大ニ暑し。寺

ニ而ハ茶菓のミ、帰りかけ寺門ニ而松下父子ニ

逢、先へ帰る。夫ハ権七伊勢や江やり何かいそがしく、のしめ長上下取寄候。明日大御能拜見て出るゆへ。夕方藤助主来らる。しやうじんあげ看取寄、一盃出し、夜四ツ過頃帰らる。

●廿六日。大ニさむし。しかし不降。朝七ツ時ハ母

君起出てままたく。小梅ハ少ミ頭痛腹痛ニ而おき

す。権七ヲつれて拜見ニ出る。七ツ比権七用事出

来ゆへ熊ヲやとひニ行よし也。むかへニハ熊か行

筈。白米二升又兵衛ニ而取。マンチウ十城之口へ

遣ス。重箱借用申礼也。熊七ツ比来り直ニ行。夕

方主人トつれて帰る。明りハ用意し候へ共不入。

ままたへさす。赤はん持帰る。夜野呂清吉来酒出

ス。

●廿七日。大ニさむく一昨日ハかたびらニ而ちやうと

よく、今日ハ拾ニ而ハまだ寒く羽織杯引出して着

る。会やめ主人七ツ前ヨリ野呂ノ事も有山本彦十

郎殿へ行。夕方田中ノ使人十助本八さつかへし又

次ヲかす。先日残りし廿五ト廿七、廿八、廿九、

三十、卅一、卅二、卅三八さつかへし又こちらより先日ノ廿六ト卅四、卅五、卅六、卅七、卅八、卅九、四十合八冊かす。直ニ帰。岩一郎米つき。

●廿八日。時雨。昼前る野呂清吉来る。酒飯ヲ出し八ツ前迄咄ス。会やめ。直覚もめん持参十三匁五分。是ハ権七分生もめん。三尺三分六り。其外事なし。

○廿九日。うつとう敷天気也。学校当番也。岡本民楠看三尾持参。覚門寺久しふりニ而来る。絵二枚先日ヨリ書有しヲ渡ス。同人親廿三日ニかへりし由也。昨夕お金下すし持参、直ニ帰る。尾上香一本遣ス。茶五斤目方老貫三百目わけて貰ふ。梅本る。晦日。楠本や前髪来る、小梅菊書。大ニわろく、何枚もく書。大ニ紙ついやし誠ニこまる。冨之助礼ニ来。母君不快。

○十月朔日。快晴。鶴なき誠ニのとか也。米出る。お祭り申。昼後八ツ比浅之助来る。松下礼ニ来る。帰らんとする時酒出ス。有合物ニ而、其内九右衛

門又来る。松下ハ帰る。魚久へ看ニ鉢取ニやりかなんと考本取。吸物こしらへる。其内雨降来。省太郎殿傘かりニ来らる。九右衛門江も下駄傘かす。楠本やへ遣ス絵書。又わろく多く紙ヲついやし扱こまり候へ共やめす。主人も詩書。七ツ比る雨降。松下富之助事改名八百輔と云よし也。一位様ノ御名にさしつかへるよし也。万吉又来る。岡本ニ來り居るよし也。明日から又よみニくるとの事。(これは補外に記載)酒出シ客三人。

●二日。早朝起出八ツ比也。支度ととのへ七ツ比る岩一郎竹ノ森ノ御覧ニ出ル。仕合ハ鈴木八十郎ノよし。初大刀ハ勝。跡からハマけ。赤ままたく。田中九右衛門る雨具かへしニ出入ノ人来る。庭迄。直ニ帰る。浅之助来る。酒飯ヲ出ス。書画合三枚楠本や久兵へ江権七もたせ遣ス也。遠藤保五郎あい開キ沓ツ持参。池田忠右衛門菓子十斗持参して清江月むかハリノよし。安兵へ油かす持参。工料竹代払。合五枚疊紙二ツ。(これは補外に記載)酒出シ。

○三日。御能有之、上座安藤殿、二ハ山中殿、三たん

こ殿、四ハ渡辺ノよし也。石橋、釣狐等有。主人
昼迄岩橋へ行。昼後帰り又村井へ行。定二郎ノ妻
此節病氣ニ而定次郎他出成かたけれハ両親もあつ
みて座敷へらうこしらへ入置よし申ニ付いかか致
てよく候半との相だん也。誠ニとふ共仕方なく候
間先しはらく見合夫ニ而も直らす候ハハ集にした
かひ左様とても被成よとの事のよし也。夜万二郎
ニさらへて居る。四ツ比帰る。酒井がまんぢう二
重送らる。

●四日。又雨降。四ツ比藤助との来る。家ノ事相談ニ
付藤四郎ヲも一所ニ酒出ス内小出主計来る。右ハ
此度熊野へとうしニ参候ニ付道ノ事ヲ藤四郎ニ聞
合度との事。一所ニ酒出し聞合ス。皆々昼後帰ら
る。夫々仕度して山中へ行。今日初也。焼物ノ鯛
くすし杯持帰る。権七ヲ馬つき利兵へ方へ着もた
せ遣ス。くれもころ成。代四奴九分、数五ツ馬つ
きの利兵衛と云者所へ遣ス。省安娘つねの昨日帰

り候よし也。其夫より返事よこしこす。酒出客二
(これは欄外配載)
人。

●五日。会ニ而山本、栗、富永、札川来る。跡ニ而一
ツ酒出ス。夜四ツ過迄。くり山いな五本持参ス。
頼母ノ事云。(これは欄外配載)
酒出。

○六日。大ニさむし。朝七ツを起出て大御能拝見ニ岩
一郎行。梅本がさをわるる。お大工頭中村三左衛
門と云人さそひニ来る。文太郎ハ不行。万二郎行、
四ツ過帰る。紅葉賀とあま狂言式ツ程見て来候よ
し也。天気よく誠ニ朝日ノかかやく有様忍にもか
かれぬよし也。主人頼母ノ事ニ付岩はしへ行。る
(これは欄外配載)

○七日。大ニ快晴ス。七ツ過る頼母ノ申合ニ而岩は
し、山本、岸、市川等来。藤四郎も同様。善之助
ヲよびニ権七ヲやりし所、同人出来り後刻おそく
共可参と申されけれと不来。榎本来る約束なれ共
不来。塚山も不来。(これは欄外配載)
酒客五人。

○八日。快晴ス。芳右衛門来る。酒出ス。八ツニなり

しゆへ主人山中へ行夕方帰。雲林来る。待せ置てかゆたへて逢内、田中善之助来る。酒出ス。魚久ニ而取。肴二鉢取。あち一本も取。四ツ過迄咄ス。万二郎茸かりニ行ミやげニ三本くれる。夫ヲ善之助へ送る。(これは欄外記載)酒客三人。

○九日。快晴。昼から少々曇る。主人学校当番也。夜迄志賀、岩橋へ行。留主中長屋専之丞ヲ肴三尾、松茸式送らる。常に心安き事もなき人ゆへ如何と申候へ共学文ノ先生へ行と内ニ申候を子供云ゆへとめ置。主人帰後聞ニ御試ノ事頼有之との事。一昨日池田ニ安産女子今日しるわかし餅送らる。夜廻状来。辰次郎様御病氣御養生不被成御叶当月二日亥申刻御卒去被成候事。右ニ付鳴物ハ今日ヨ三日停止。普請者不苦候。

十月九日

(これは欄外記載)
るす。

○十日。少々曇る。朝服部からたうやくノ事聞ニ来る。昨日熊江書そこなひノ絵七枚遣ス。楠右衛門望ノ

よし。炭ノ事と銀拝借の書附出ス。藤四郎加判。

○十一日。今日も快晴ス。小梅絵書。朝主人ガンキ丁へ行。平七との地藏ノ辻に居るよしニ付跡より行。弁当持行有之ゆへよはれる。頼母子ノ事頼む。下条へ申入れよとの事。浅之助方へ手昏權七ニもたせ遣ス。万吉へも同前同頼母ノ事。夜、宝祥院へ行、留主也。酒券三、御所かき十一持参ス。今日ハ亥ノ子也。御祝義ノ処一昨日廻状来相止ム。十五ニ帰るよし。(A.T.)松下八百助来る。炭ノ切手へ加判せよとの事。式拾俵取よし。法生院留主ニ而つれノ人江渡し帰るよし也。(これは欄外記載)
るす。

○十二日。夜前ハ風ノ音もつよく大分曇るゆへ雨とのミ思ひしに大ニよき天気となる。四ツ比ヶ塚山角藏来る。夫々前岩橋来りわかへ行よしゆへ直ニ帰る。昼後浅之助来りきしへ行よしニ而直ニ帰る。

夫々肴や来る。色々五匁式分ノヲ取。内鯛五枚ハ池田へ送る。松やニ而酒一升取、一ツ出ス。八ツ過藤助との来る。同座ニ而夕方迄居る。静ノ絵角

蔵へ一枚遣ス。兩人帰りし跡へ浅之助来る。直ニ婦。カンキ丁梅本を手昏万二郎持帰る。伊勢ヤノ事頼候処美しう断との事。安兵へ来る。古懸物一ツかす。酒吞す。泉劔行田を使来る。此度出水ノ見廻也。其男ハふき畑ノ者、名池田岩助と云、十四日ニ又あノ方へ参候間何ニ而も持参との事。
(これは欄外記載)
 酒客二人。

○十三日。山中氏へ行。安兵へ来。一時斗直ニ帰る。

七ツ過が浅之助来る。酒出ス。魚万来り肴一尾取。代七分。マンチウ五十取。増代とのと亀野と

江川江行(ムシ)□かしニ而寄直ニ帰る。権七ヲ山本と富

永江断ニやる。(これは欄外記載)
 酒客老人。

○十四日。終日誰も不来。権七ヲ榎本へ判ノ事頼ミニ遣ス。マンチウ廿送る。同人ノ判実家ニあつけ有との事。右ゆへ又伊藤泰蔵と鈴木へ行。此度ハ学官ニ而御かし増借用ノ筈。鈴木芳右衛門方へ肴二尾、魚九ニ而取、持参のよし、代式匁。宝祥院いとま乞ニ来る。明日帰るよし。廿日斗立て又参

るとの事、庭から帰る。今日ハ大納言様大地寺へ御参詣とて権七出しか御延引のよし也。雨天ゆへ。扱竹田敬安此度朝ひなに組し毒薬調合によつて主人ハ里江御かへし五百石御取上ノよし也。順養子ノ人ハ有之よし。さしもの名家おしむへし。朝ひな惣左衛門千三百石御取上是ハ先日也。別荘へちつ居次男召連候様ニとの事。至而せまき所のよし。妻女ハ親里へ御かへしノ上おしこめ置候様ニとの事、至而美人ノよし也。菊千代様ノ母御と兄弟ニ而、松平氏ノ娘ノよし也。大そうどう也。尤松平ハ此節さしひかへ。

●十五日。会ニ而山本、栗山、富永、札川来る。善之助一番ニ来ル。残り酒出ス。藤助殿も来られ共々咄して一所ニ帰る。魚久ニ而取口三人分取。松屋ニ而酒一升取。有田を伏付。(これは欄外記載)
 酒二人。

○十六日。少々曇れ共不降。美濃状又ハ京都丸山直七方大橋勝次郎と云名ニ而状来る。梅本江ノ用事。夕方寛円寺礼ニ来る。ぬり盃箱入巻と酒券一と持

参、直ニ帰る。夜主人内ニ居て母君、小梅、岩一郎、鷺の森へ参る。魚九来る。うしのした一取、代三分八り。浅之助来る。酒出ス。平鯛一持参ス。池田を茶ノこよこす。(これは欄外記載) 酒出一人。

○十七日。じみくくとさむし。榎本へ行。留主。浅橋来り画ほしと云。書ぞこなひ三四枚と又半切へ菊書遣ス内、主人帰り酒出ス。かしへめん鳥一羽持参ス。代四奴梅本ニ而かり。夜お重来り、久しくはなす。(これは欄外記載) 酒一人。

○十八日。今日ハ頼母ノ事ニ付、藤助、塚山来る。どしやう汁たき、裏のいもほりて出ス。浅之助ハ跡を来る。鶴めし杯する。魚久を造り看持参。是ハ岩橋を。其内夕方雨降出し三人江雨具かす。今日ハ大納言様かた江御参詣。女中御つれ大奥入りのよし也。黒江のうバこり江下すし十斗持参、夕方帰る。夫ノ名ハ日高や伊助と云よし也。御坊前とやらん品ニ寄とめてくれよと云。ちやうちんかす。安兵へ来り山中江断ニやる。(これは欄外記載) 酒出三人。

○十九日。大ニさむし。夜松下来らるゆへ、権七おこし酒取ニやる。切手頼母ノ事米与江頼くれ候様申置候へ共断○扱此度ハ学くわん御かし増かる。小原八三郎ノセわ、百拾九奴二分八り也。直ニ火事羽織トわた入式と拾は折受る。(マツ) 当五日庄兵へかしたる九奴ノ拾も受る。松下隠居一昨日(マツ) 猪口ニ二ツ吞てより不快ノよし。林ニ見せしニるいちうのよし云。足たたざるよし也。七つや筋夕方ゆへ火事羽織斗取てハ跡少々不足也。明日とて其ま。

○廿日。快晴。誠ニよき天気也。廻状を廻しニ行。道ニ而奥村ニあひ頼ム。又省太郎殿も来る。廻状出候へ共私を先かけ廻したりとの事。先ノハ亥ノ子ノ事、跡ノハ十三回御年忌ノよし。御名わすれし。忠左衛門来り菓子少三(ムシ) 有くれる。右ハ此度大納言様思召ニ而御家中七十有余ノ者等へ御庭拝見被仰付、七千人斗ノ人数ノ内当主ニ而老人ハ七十人程ノよし也。其中へ甚左衛門も入、病氣ノ

つもりゆへ夜前御菓頂戴ノよし。いつれもきのふ罷出御ちそう頂戴ノよし。其うへ大納言様御あしらひ、其上嶋ちりめん巻疋ツツいたたくとのうわさ、いまた実かハ知らず。扱比度大御能御入用三日ニ而老万五千両ノよし也。御菓子代。明宗院様先大納言様ノ御実母也。

○廿一日。快晴ス。学校中皆和哥へ集。昼から主人も行候処一向人気ミへす。塩やと云茶やニ而休ミ帰らんとセし時、江川甚蔵ニ逢、又かの茶やニ而休ム内、久家も来り、七ッ比彦十郎殿も来る。是ハ舟ニ而来りしゆへおそなりたるよし也。夫からおひく茶やより馳走出る。しかし、もはや江川少々何か持行し品ニ而酔たるゆへ何もたべられずとの事。帰りハ舟ニ而帰りしゆへ五ッ過かへる。浅橋ニも逢候よし。嘉兵へノ母来る。八十二歳ノよし也。嘉兵へも先月ノ初ニ病死仕り、お安と二人さいく町ノ裏ニ居候。お里ハ奉公してい候へ共、金蔵か付まとふゆへ、しつかりともゐす難義

ノよし云。一重物かけニ而る候との事ゆへ、わたノぬきで一ツと茶一袋遺ス。城ノ口も来る。かき九ツくれる。桶や来り風呂あつらへる。木や釜持帰る。(これは欄外記載)

○廿二日。評定所当番也。直ニ帰る。浅之助来り、又晩程参るとて直ニ帰る。夕方大ニしけ天氣ニ而北(マ)より風降ゆへ、是ニ而ハ来るましとて休む。夜、藤四郎との来る。頼母ノ事上野へ申見候へ共埒明スとの事。酒一ツ出ス。夫婦娘宿の人皆集(ムシ)合。酒出三人。(これは欄外記載)

●廿三日。降。昼前浅之助来る。傘持参。酒出ス。下すしも出ス。八ッ比彦権七つれて先山中殿へおしへニ行。田中九右衛門方へ寄て行。権七ちやうちん取ニ帰る。またへて直ニ行。夜五ッ半時比帰る。ごまの餅ニ紅菊本そへて頂戴。内田善助へ寄てきくの本半わける。酒出候よし也。母君さきの森へ参りかけ松下へミ廻ニ寄、下すし二ツ送る。隠居大ふんよしとの事。児又少々あしくとの事○

扱、此間七十有余ノ老人御膳頂戴、御馳そう色々御すし御取口皆おし木(折敷)へもりてならへ、御茶子ハ一人分七匁ツツノ御くわしまんちうへハ寿ノ字紅ニ而書。三品程也。八十余ノ者へハたん物ちりめんとやら頂戴ノよし。根来方大夫もあるよし、有かたき中ニ、此人ノ次男常々あしく此間ほんかうとやら勤たるニ仕方あしくとて仏たんへ小便したりとやらん、実かハ知らず。是をミレハ長寿もいらぬ物也。となりノ池田様も此度ハ罷出て難有かるへき所、是ハおしむべし。内田官藏も出、嶋伝右衛門も出る。(これは欄外記載)酒一人。

○廿四日。藤助との来る。酒出ス。下ずしニ而御所かきへ夜前頂戴ノ菊本を入れて出ス。小梅張箱はりかけ。着物きかへ、大ニさむく風ひく。日暮ニ平七との来る。鳥ニ而酒出ス。浅之助も来る。雲翳きつ式ツ、久年母だいたい一ツ送る。ふすま張ゆへ画ほしとの事、直ニ帰る。小梅ねる。藤四郎とのニも酒出ス。(これは欄外記載)酒出客三人。

○廿五日。大ニ快晴ス。会ニ而山本等来る。善之助暫く残り酒一ツ出ス。小梅気ささうねてゐるゆへ不出。下すしニ而酒。(これは欄外記載)酒出。

○廿六日。小々時雨。今日ハ藤助との和哥へ銀談ノ事ニ而行ゆへいてくれよと云。しかし主人ハ服しやゆへ不行。浅之助方へも行筈ノ処是も得不行。昨日田はたる下すし五ツ六ツくれる。今日も小梅ねる。権七(ムシ)□□帰り酒取来る。岡本もすし二重。

○廿七日。快晴。大ニ暖和ニ而至極ノ天気也。今日ハ大納言様御ししがり也。先日ゐのしし二疋ヲおひ入外へ出さるやう番人付てかかりをたきはんまへも何かあてかひ置との事。北山辺平井直川辺ノよし也。浅之助来り直ニ帰る。七ツ過画二枚万二郎持参。カンギ丁浅橋へ送る。田中も張箱二ツ持参。是ハ昨日也。

○十五日。早朝大坂ノ赤石清祐ノ粹来る。四匁八分私。又老奴 小円三 老奴 ギンふん 二匁老分 キヌ 右之通置て行。

老奴筆

八分 同

○廿八日。藤助殿来られ大ニ主人酒ニよふ。仏手かん一ツと雲笏橋數十藤助殿へ送る。右ヲ振取長十郎方へ持参ノよし。其節魚万も来り看取。くずしも取。是ハ岩橋。夫々休ム間もなく主人又山中殿へおしへニ行。其跡へ信衛(ムシ)良娘つち代ヲつれて来る。有合ノ肴ニ而酒出ス。夕方帰る。小梅ハ風気なれ共田中ノ箱へ絵書かけ。酒出シ客五人。(これは欄外記載)

○廿九日。大ニ快晴ス。学校当番岩橋へ行。はし本へハ不行。今晚ハ家々召状致来ノよし知らセ手昏来る。三谷も同。是ハ跡目也。小梅同張箱書。魚万来り看取。鈴木芳右衛門を茶子来る。

○晦日。大ニ暖和也。昼前浅之助来る。酒出ス。権七酒取ニやる。切手請ニ書出し来る。しかし札十枚ほかなし。是ニ而まかなふ。八ッ過塚山来る。酒出ス。其外岩はしも来られ直ニ帰らる。小梅同しく箱書。五匁魚万へ、五匁八百岩、五匁同定へ

遣候斗。跡ハ断置。一月ノ内酒出さぬ日十日、客人数同人なれ共四十一人へ出。(これは欄外記載)酒出二人。

十一月朔日。大ニ快晴。早朝より主人ハ釣ニ行。同伴ハ岩橋、上辻、杉浦等也。万三郎つれて行、夕方過帰る。は七十五斗つる。留主中小梅張箱書仕廻。権七ニ田中へもたせ遣ス。疊紙ニツ送る。内田善助を児ノ産れし祝ひ来る。赤飯一重也。名徳一郎、印ほりも来る。扱、今日ハお天守御はし御立初ノよし立初ノ式相済て皆々けがなきやう山東へ参るよし也。右ノ御祝義ニそなへし由ニ而菓子三ツ梅本をわけくれる。三宅ミン之助来り袖八ツくれる。直ニ帰る。

○二日。はり箱書。風呂初てたく。先年を置たるままの木ニ而今度造らす。代八匁八分。桶栄吉。小梅ハ風ゆへ不入。

○三日。快晴。主人山中へ行。田中へ行。帰りて又鈴木芳右衛門方へ行。今日ハ先芳右衛門との十三回忌法事也。岩一郎同道。夜浅之助来る。帰らんと

セし処へ主人帰る。一寸酒出ス。信衛もよる。家内もよはれたれ共小梅ハ風未だ直らす。母君ハ手廻し出来かね不行。

○四日。快晴ス。よし本へ肴五尾送る。いさき五、代五匁、魚万ニ取。日高や江酒二升取ニやる。七月の初而也。夕方、藤助との来る。木代、くすし代受取。くすしハ老匁六分也。木代ハ六匁五分。是小梅本へ渡ス。七山へ張箱送る。山半江むけ頼ム。同家へゆ五ミかん六ツ送る。昨日筆取。酒喜三十文。赤もし書一〇廿四文日記〇九分墨木類〇四十八文墨〇酒大八分面書二本〇四分小又筆まかへ式本朝日也。

○五日。快晴。会ニ而山本、くり山杯来る。富永ハ先ノ時も今日も不来〇塚山、柳窓来る。夕方過河野左近も先日ノ礼ニ来る。一所ニ酒呑。又跡々浅之助来る。志賀ノすすはきゆへおそなりしよしニ而善之助来る手帑持参ス。夫てハ事かひぬゆへ又遠藤一郎ヲ頼ムとて、つか山、柳窓三人つれ立て

遠藤へ行。河野もかへる〇其跡へ又野呂来る。主人不逢。酒出ス。少々風氣とて帰る。山半袴ミセニ両度来る。覚しき筋なし。又くる筈。酒出客四(これは増日記)人。

○六日。少々くもる。人休ませて主人善助方へ行。八ツ過帰る。権七ヲ坂本やへ本取ニやり、又かセたやへも遣ス。百人一首ノ事。坂本やニ而六匁ニ而老さつ取。取女要小倉麓と云書也。

○七日。早朝。権七田中へ寄らす。今日ハ日前宮へ御宮詣ノ御供のよし也。四ツ比帰り少々雨降しゆへ御見んばん也とて田中ノ返事よす。又善之助ノ手帑。其文ハ此間両弥へ御頼ノ事成就致候ニ付世話人中ノ誓紙ヲ善助方へ入置くれ候様善助ハ又両弥へ誓紙入置候よし也。右昨日申上候客人なかりしよし也。夫ゆへ又岩はしへ権七をやりよひニ行。昼後來らる。酒出ス内又田中ノ手帑来る。妹十日ニ引越候ニ付八ツ比ノ御三人私方迄御出被下候様夫先へ御同道可申との事返事ニ而参候へ

し。しかし小梅ハ風気ゆへ不分と申置。八ッ過七ッ比藤助帰らる。今晚頼母子会ゆへ行との事。浅之助ヲ手紙礼万二郎へことつける。又夕方来る。

相つて藤助とのの会次ニ居る処へ行、長十郎ニ逢頼事有ゆへ也。酒出二人。(これは構外記載)

○八日。大ニ暖気也。昼後過山中殿へ行。田中へ寄候。処近所ノ人ミヲよひ候よしニ而振廻。手道具かざり有よし、一盃吞て帰る比ハ五ッ比也。権七ヲ伊勢やへ袴取かへニ遣ス。

○九日。大ニ暖気也。今日ハ弁書御試なれとも少々ふ快ニ而引。夕方ろかんき丁梅本法事ゆへ岩一郎つれて行。四ッ過先へ帰る。母君も鈴木隠居さそひニ来りお重と同道。少し跡ろかへる○昼前芳右衛門との今晚ノ事申合ニとて来りしヲ頼母ノ事咄スゆへ二階ニ而一盃出ス。正住寺来る。余り御そ縁ゆへ十四日ニ遊ひニ御出との事。小田ノ隠居も御出候ハハよびニ遣スとの事。茶出スのミにて直ニ帰る。酒券二梅本持参。(これは構外記載) 酒一人。

①十日。大分寒気ニ成折々雨降。権七ニ肴もたせて嶋

本伝右衛門へ遣ス。代六匁五分。め鯛二枚、ばら三也。大ニセわし。一昨日ハ夏肩衣へ裏附又ハ袴ノすそ直し杯大ニセわしく。七ッ前浅之助来る。

一寸酒出ス。昼比酒井省安来る処へ藤助殿来る。同しく酒出ス。老奴五分ノ取口魚久ニ而取。扱田

中とハ八ッ比ろ私宅へ来てくれよと云ニおそきゆへ先権七ヲ断ニ遣ス。しかし又岩一郎と田中へ向行。夜ハ天気よく成。九ッ過比帰。皆ねる比ハ八ッ過。鳥またハ、すし、取口焼物、鯛杯持帰る。

権七ハ式匁貰ふよし。(これは構外記載) 酒一人。

○十一日。六ッ比起出で、茶たく。学校江出ル。少々気分あしきよし也。焼肴持参。皆々くじ取ニ而持寄ノよし。彦十郎殿ハすし。泰蔵ハ取口、久下ハしたし、鳴沢ハミやうが、藤助ハやき肴ニ当りけるよし也。子供八十人也。七ッまへ相濟けるゆへ北嶋辺へ行候半と申候へ共今日ハ御鷹野ゆへかけ作り下へ行。大ニさむく、弁当持ヲ待けれ共来る

事おそきゆへ浅橋ニ逢、此人ノしるへノ家へ行て
酒呑よし。夕方帰り、やき物鯛梅本へすそわけ。

正住寺十四日ニ来れと云しヲ断ニやる。(これは欄外記載
るす。)

○十二日。快晴ス。昼前藤助との来る。其節仁井田ノ
手帑持参して、奥熊野新鹿村い師和田右門伴仁建
入門ス。金百疋持参。直ニ荷物持来る。藤助殿軽
く着かひ料理して酒呑。昨日取置たる湊ノ酒あし
く、又九軒ノ丁へ壺升取ニやり、亭主もよびニ行
候へ共不来。又夕方滝本来る。残物ニ而酒出ス。
夕まま仁建ニ出ス。細工町へ重箱かへしニ遣ス○
上田忠左衛門大納言様を被仰付御つば式(マ)ニ昼夜ね
すニ打たるよし也。城ノロニ而米五升求、四匁五
分ノよし也。百疋かへ残る。(これは欄外記載)客三人。

○十三日。大ニ快晴ス。昼後山中殿へ行、留主中浅之
助来る。酒出ス。夕方帰り又市川齋方へ頼母ノ事
ニ而行。今日田中九右衛門へも寄候よし也。つる
べ一求、代七十文。(これは欄外記載)客一人。

○十四日。大納言様岩屋江御参詣ノよし也。藤白辺御

通り。廻状来る。文言、御帰国ニ付御拝領之品御
城ニ於御披ニ付熨斗目半袴ニ而五半時登城例月之
御礼無之筈。廻状ヲ志賀へ岩一郎持参ス。八ツ過
る主人兼而約束ゆへ正住寺へ行。俄ニ風雨雷鳴、
夕方ハやむ。夫々善助方へ岩橋へも寄候由。其前
浅橋来る。下すしニ而酒出ス内塚山角蔵来る。同
座ニ而酒呑。魚万来り着色々取。夜すしつける。
大ニ暖気也。(これは欄外記載)酒客二人。

○△十五日。市川がかん書持参。又一さつかへス。手
帑添。登城。風立けれ共雨ハ不降。今日ハ日前宮
前ニ而馬かけ御覧のよし也。正九ツよりとの事。
干鯛トするめ頂戴、帰り嶋本へ礼ニ寄。又権七ヲ
正住寺へ下駄返しニやる。会ニ而八ツ比が山本省
太郎との来る。くり山、札川跡ニ而酒一ツ出ス。
夜四ツ比迄。池田がすし十七八と取口杯少とくれ
る。児ノ名付のよし也。藤助との来る。下条がノ
金二百疋持参。うたひうたひ九ツ比迄。

○△十六日。早朝、藤助との来る。三丁目ノ家ミに来

る。出かけ一ツ出ス。残物ニ而。千太郎案内して家ミに行。田中の手帯来る。十七日ニハ皆来てくれとの事。返事先得不行と半断り。主人浅之助方へ行。志賀へ行道ニ而善之助ニ逢候処何分来てくれとの事ゆへ又こしらへて行つもり。右ニ付かんき丁へ万二郎ニ手帯ことつけ断申たるに又権七をやる。小梅ヲ頼ミニ行。母君お寺いてくれる。大ニセわしく、講掛たり色ミする内七ツ比迄かかる。

○△十七日。今日ハ藤助とのへ頼母寄合ノよし也。朝から小梅斗。八ツ比熊野刑部久々ニて来る。是からせい僧ニ成よし也。酒出ス。主人先岩橋へ寄て行。小梅、岩一郎、権七こむめと行。夕方あらへ付、嶋本ノ家内と同時ニは入る。色々馳走出ル。座定りて、にはか舞三味ニ而にきヤか也。

上座嶋本伝右衛門、二堀場芳助○種楠○其弟○豹藏○岩一郎○楠左衛門

上母者、堀ハノ妻、男子、娘、嶋本ノ娘○よめ○

常代○小梅○左市○こまや○善助兄○湯川○善助
○湯川妻○虎○同母○楠左衛門妻等他。小梅とハ安兵へノ娘下
女ニ。八ツ比帰り小梅へとまる。ミヤけ色ミ有○
昼山形屋ニ而赤キ衣服かる、代九匁。其余ハかんき丁ニ而かる。夫か六ヶ敷ゆへヤめ候半と存候へ共三(不明)行ニ成。嶋本の土産物有。

○△△十八日。大ニ快晴ス。小梅ヲ又田中へ手つだひニ遣ス。夕方帰る。安兵衛、熊来る。垣くり木割。夜梅本へ礼ニ行。衣服かへし。万二郎と権七つれ行。酒、そはニよばれる。岡本の肴二、すずき、ゑひ合五くれる。夫ヲ梅本へ持参ス。ミかん十一同様。今日ハ頼母ノ事頼ニ付人ミヲ会次ニ而振廻。岡崎ヤ次郎八、山形屋源右衛門、直川ヤ七兵衛、善助、善之助、岩橋、浅之助、塚山等也。浅橋もとなり座敷ニ来てゐてマンヂウくれしよし也。扱小梅(説明つけ)(安兵へノ娘ノ事)五半時過帰る。会次ニ而取来りしすし有。皆々たべる。

○△十九日。大ニ快晴。学校当番也。こんたひ式先日

ノ酒切手ノ代りとして梅本くくれる。善之助、塚山、浅之助等来る。岩橋もくる約束なれ共不来。

○廿二日。快晴。学校文会ニ而出ル。夜田宮へ寄しよしニ而四ツ比帰る。たんざく巻くれる。先日結構ノ悦ノよし也。娘琴引しよし也。

○廿一日。さむし。九右衛門来る。酒出ス。有合物ニ而。夜清吉来る。酒券一ツ送る。主人北村へ行。

(これは欄外記載)
酒二人。

○廿二日。快晴。万吉来。女も万吉ヲたつね来。夫ニ付かれ是セわ。忠兵へも万吉ヲたつねニ来ル。昼後迄万吉ゐる。飯出ス内、主人ハ頼母ノ事ニ付方々江行。浅之介へ九右衛門か申来り候事ヲ相談ス。八ツ比帰る。万吉も帰る。夜浅之助、藤助頼母ノ事ニ付来る。酒出ス。田中ノ九右衛門申候事ヲ柳窓へ咄ス。そは出ス。五ツまへ帰る。跡ニ而内へ寄。藤四郎も来り咄ス。主人ハ頼母ノ事ニ付庄大夫方へ行。酒出されしよし也。ますノミ少少もらふ。有田ガミかん来る。善之助八ツまへ来り

明日来てくれよと云。田宮作右衛門来。酒式人。
(これは欄外記載)

○廿三日。風呂たく。主人昼後山中へ行。直ニ田中へ行。岩一郎七ツ過る田中へ行。ミかん少少持参ス。

○廿四日。四ツ比主人方々江行。藤助当番ノよしニ而寄らすゆへ直ニ帰る。夕方方岸へ行。浅之助さそいニ寄。七ツ比吉田庄大夫来る。頼母子ノつかへ候杯申来る。藤四郎ニ勘定頼ム。四ツ過帰る。松下頼母へいかかと言て直ニ帰らる。心入也。

○廿五日。今日ハ御ししが。根来辺ノよし也。会ニ而人々来。山本ハ風氣のよし。富永、くり山、札川、田中ハ先へ帰る。榎坂も先へ帰る。酒出ス。九ツ比迄咄ス。九ツ時ねる。夜長し。酒五人。
(これは欄外記載)

○廿六日。頼母ノ事ニ付昼後塚山来る。よほと過て浅之助、藤助来ル。滝本源三郎、鈴木五郎兵へ、市川ヲよびニやり、五ツ比来ル。酒出し、めしも出ス。根来辺御ししかり十四五御手ニ入候よし。

○廿七日。少し雨降。七ツ比方起出て御能拝見ニ出

ル。権七つれる。梅本ニも拝見ニ出候ゆへおこし
てくれる。にきりいいもしてもらふ。留主中善助
礼ニくる。直ニ帰る。頼母ノ帳浅之助とて六尺
持参。夕方過主人帰。今日ハ御舞台新ニ立しゆへ
始而也。拝見ニ出候人々もむさとは不出、諸役所
ノめいゝ、丁人も御出入ノ筋斗也。先あらまし。

舞 千歳 小七郎 嵐山 三郎右衛門
三番叟 万歳 義右衛門

間 猿賀 鹿太郎

三本柱 熊太郎 頼政 五兵衛
貞蔵

間 高原千代之助

咲花 三右衛門 湯屋 三郎右衛門
伊右衛門

御中入

羅生門 又四郎 間 大谷道之助
伊右衛門

祝言 安五郎
虎之助

鱗形 已上

右あらまし也。又次ハ来月三日ニ有之との事

三日 御雛子組

嵐山 文次郎 宗三郎 力蔵 引くくり
伝右衛門 龜太郎

良へ 岩本右衛門 胡蝶 作之進 元九郎 源之進
小七郎 藤本十助 藤三郎 元五郎

松久 又兵衛 虎松 龜太郎
徳二郎

独吟 鳥追 九進

富士大鼓 筑後守 九兵へ 龜太郎
藤二郎

狐塚 太郎 良へ 松井熊太郎 鷹頭 三郎右衛門
万歳 次郎 松井政十郎

利兵へ 庄五郎
伝四郎

御 照若 九郎兵へ 弥左衛門 海人 虎平
虎八 龜太郎

平九郎 又之助

徳二郎 庄五郎

廿七日ニ出候節ハ赤飯くすしかんひやうつとぶ着

切ミ、ほし木へのセ頂戴也。尤御酒も出ル。三日

ニハ上ニも照若御舞ノよし也。

○廿八日。山中々断。有本ノ別荘へ詩会ニ而行。約束

之所断来ル。主人方ミ江頼母ノ事ニ付行。夜、藤

四郎へ酒出ス。源三郎、藤七来る。鈴木五郎兵へ

弟頼母ノ帳持参。滝本ニ書の布ヲことづかりく

る。(これは欄外記載)

○廿九日。梅本の頼母子ニ付千太郎と同道ニ而岩一郎

さいく町へ行。夜信衛来ル。夕方主人やいとすへる。夜庄大夫江行。頼母ノ帳取ニ寄。利まんきつ少く持参。あはち柴セ来る。夜信へ来る。

○晦日。朝、主人善助方へ兩弥ノ判ノ事頼ミに行。三匁式歩ノくすし求て遣ス。留主中庄大夫頼母ノ帳取ニ寄。八ッ過松や吉兵へ来る。酒出ス。帰ると又善助来る。兩弥ノ判おして帳持参。酒そば出ス。昼仁建る金二步受取。八百岩へ壱步渡ス。柴三荷持参、代末遣。権七ニ三匁かり。酒壱升まつやニ而取。(これは欄外記載)客一人。

○十二月朔日。七ツ々起出て岩一郎仁建と日前宮へ参。昼後、主人少く風氣。夕方、浅之助来る。酒飯出ス。其外何事もなし。喜多村る手帯来る。有田やニ而紙取。

○二日。

○三日。今日仁井田結構。奥熊野御代官本役ニ成。風氣ゆへ不行。其外三十軒程有よし。向へ小笠原へお廣敷御用人ニ成。

○四日

○五日。佐氏ノ会納ゆへ皆々来る。くり山を使。金二步又酒二升。是ハ富永とくり山と也。省太郎先へ来り、佐つ川、くり山、とみ永等也。跡から清吉来り塩から少く持参。夜四ッ過迄咄ス。主人風氣しかくセぬゆへ半をねやへ入。土入ノ人田中よよこす。だいたいノ木ほしとの事。壱本ノ事ゆへ遣しかたきゆへ、うんしう橋ヲ上候半と云。酒一はいのまて帰ス。カンキ丁を酒とう少くよこす。万二郎持参。(これは欄外記載)酒四人、又壱人。

○六日。今日ハ侍講なれとも山本とく学先生ニ代ヲ頼ム。頼母ノ申合にて人々来る筈なれともいまた不來。炭壱俵求、代三匁七分。権七かひニ行。(これは欄外記載)酒六人。

○七日。はるる。水嶋ノ薬取ニ行。風氣しかしかせず。昼前山本彦十郎殿来らる。権七月代しに行。人なくこまりし処、万吉来合セ魚久迄行。直ニ二程持参ニ而酒出ス。昼過迄咄ス。品ニ寄東都へ行かけ

事仰付らるる事も有ん間心得居候様ニとの事。野呂清吉より美人画縮地ミセらる。万吉ニもめし出ス。

○八日。昼前岩一郎田中へ見廻ニ行候処大分あしく食事すすまぬとの事。せんへい一袋持参ス。魚万来り、肴四ツ取、二匁四分也。磯干鯛一、ゑふた一ツ松下へ持参。母君行。頼母ノ帳ミセル。彦右衛門とのるすゆへ置てくる。権七諸所へ廻状持参。頼母十二日会次ニ而興行ノ事ヲ言。早朝藤四郎とのへ廻状認メ頼ム。役所へ持参して書役ニかかせしよし也。夜鈴木芳右衛門との梅本へ来ル。ちぬ一ツ送る。主人咄しニ行。夜田中九右衛門晦日ハ絵色ニ付竹水等もちひ候ニ付竹壺式本ほしとの事。則切て遣ス。夫々めしたき明朝山東へ参らすこしらへ。

○九日。六ツ起して、岩一郎仁建ニ同伴頼みて伊太きそ神社へ御きとうニ参らす。岩ハ直ニ田中へ行、仁建先へ帰る。留主中又主人も田中へ行。夫々前

岩橋藤助との来る。出産男子出生のよし也。一寸酒出ス。直ニ主人田中へ行。八ツ過比帰る。少々快方ノよし。松下彦右衛門との来る。浅之助も来る。いづれも一寸酒出ス。夜野呂清吉来る内、吉田庄太夫来る。頼母ノ事。又泉^(深目)ふけ井ノ外山と云人ノ母七十賀詩哥集るゆへ、主人と母君へ相頼まる。志賀へも頼ミくれよとの事。

○十日。大ニ暖和。昨日も今日も熊米つき。権七ハ廻状持参ス。岩はしへマンチウニセいろ送る。七ツ過る小梅見廻ニ行、九ツ比帰る。主人跡る来る。岩橋ノ事申出大ニこまる。塚山米蔵来る。浅之介不来。

○十一日。大ニ暖和。大ニセわしく仙台おてノ事ニ付鈴木芳右衛門へも行。仁建板原へ行もらふ。岡本ハ掛銀よこす。大ニセわしく。

○十二日。暖和也。風呂たく。主人内田善助へ行。留主中藤助来り梶取へ行よし。帰りかけニ又寄。此時主人も帰り居る。浅之助来り打つれて会次方へ

行。尤岩一郎も同様。此時七ツ前。安兵へ朝から来て長屋かたつける。権七も手つだふ。兩人も会次へつれ行。今日初会有信講夫々ニ付中谷沢之助来る。小出半右衛門も来る。色々事多し。千太郎、万二郎も手つたひニ行。夕方少々雨降。主人ハ夕方から行。酒松屋ニ而取筈老斗五升程。(マ)三匁五分ツツつもり。遠藤一郎を使、金百疋、砂糖一袋、掛銀もよこさす。雨降出し候ゆへ大ニ心配しけれども帰る時分ニハ上る。客六十人程有。引し人も十二人ハ有。しゃく人三人。酒ハ老斗五升ノ内式升斗残る。(これは榊外配載)三人。

○十三日。浅之助昼前入り、酒飯ヲ出ス。主人ハ田中へ行、るす。(これは榊外配載)老人。

○十四日。大ニ風立きむし。大工来る。八ッ過仕廻帰る。其比学校済々藤助、浅之助打つれ来る。はと三ハ求又大魚切ミ浅之助と藤助と持参。直ニ藤助との料理して一盃吞て又久下へ行。弁書しらべ也。浅之助ハ跡ハ少し残りて帰る。はと一羽持帰

る。カンキ丁平七殿一昨日をふ快ノ(不明)手足しひれ候よし也。○戸田、岡野召状也○平松礼ニ来る。(これは榊外配載)三人。

○十五日。大ニ風も有ひへつよく、雪降ればる。戸田殿菊ノ間つめニなられしゆへ、芳右衛門をしらセ。何分参候様との事ゆへ夕方を行。外ニ大分有。岡野平大夫殿、松平其外三十軒程有よし、伊東善次郎をしらセ手帯来る。又手帯安兵へ持来り何分晩程来るへきよし也。奥津丈右衛門跡仰付られ御足高ハ其儘との事。安兵へかへ下し土ねり仕かけ、大ニさむきゆへ、今日ハ置とて帰る。八ッ過也。熊ハ米つき。権七ヲ田宮江遣ス。大豆五升、代九十五匁。かうしねセ来る。夜ニ入、風ハなぐ。ひへハつよし。

○十六日。大ニ暖ニ成。染物、又ハミそつき、たくあんつけ、大ニセわしく。佐津川来る。肴持参。かつら三、いか二はい。酒出さんと留けれ共帰る。主人昼から方々江行。山本彦十郎殿、小阪、田中、

内田杯へ行。田中病人同様。先少々ハよき方なれ共食事すすます。亀井ノ薬、有馬、丸山、板原杯ニミセル。いづれも六ヶ敷。持病ニあらずハとも本ふくなけれ共かねて持病ゆへまたよく成事も有らんとの事也。此節水損ノ御馬下る。村下ハ一両二歩二朱と六匁頂戴との事。早朝梅本ヲヤキ物と台ノ物ヲ持参。戸田ヲ芳右衛門とのことつかりノよし也。仁井田来らる。上野かう道、鈴木五郎兵へ杯重て見廻ニ来る。安兵へかへぬりニ来る。

○十七日。さむし。折ノ雪氣。久下馬助度々見廻ニ来る。酒出しる内嘯沢(マツ)同座。跡ニ而又浅之助来る。酒出ス。主人終日宿ニ有。夜梅本ヲそは二膳持参ス。炭一俵岩右衛門持参。代不知。酒一升取。肴ヤ来りなまこ取。栄谷才二郎餅米五升とわらと持参。酒吞ス。

○十八日。昨日早朝松下御貸方借用ノ加判する。銀六百目拝借のよし也。快晴ス。浅之助夕方来る。主人留主。岩橋へ行、田中へも行由。田中へ見廻遣

ス。但白菊五十ト寿廿五合七十五也。少々快方。

○十九日。大ニ暖也。昼、浅之助来る。酒出ス。主人とつれて又行。岩橋へ行。会次方ニ而呑よし也。

小梅ハ疊紙はる。熊米つきニ来る。大ニセわしく。魚万来、魚九も来る。藤作へ上下ノ事申遣ス。向へ川覚円寺へも行。昨日酒井省安寒ニ廻ニ来る。今日増田ノ子息矢数。昼前市川齋来る。酒出ス。

○廿日。大ニ快晴ス。市川来る。詩持参ス。主人寒ニ廻ニ行るす。覚円寺来る。かけ銀三十拾目、下銀三両。是ハ祝義。今日も方々聴講有。遠藤修平次男小里儀川嶋平左衛門江養子願濟追而引越ノよし也。岩一郎かさりこしらへ、仁建手伝ひ。小梅ハ疊紙ノ及書。大ニ暖和也。夕方安兵へ来る。六匁余渡ス。

○廿一日。風立さむし。

○廿二日。くもる。岩橋ノ頼母子初会ゆへ七ツ過々会次方へ行。六拾目持参、二匁五分持参料。受取扱本圖當る。三百目也。浅之助持帰る。九ツ比婦宅。深

津々金百疋、酒券二持参。松下をせんさい持参ス。

○廿二日。大ニさむく、少々雪降。岩忠を看持参。十
五匁ニ而生ぶり一、宿ニ而遣。又十五匁交看。メ
黒鯛一、ほうく五ツ、はまぐり、右ヲ梅本と半
分ツツ戸田へ上る。権七行。ぶり半分梅本へ。

○廿三日。大ニ風有、雪つもりひへつよく誠ニはけし
く。今日も召状諸所ニ有。夕方、餅米洗ひ。誠ニ
寒く。夜ハ三夜待。九ツ過迄居る。浅之介来る。
一寸酒出す。兩弥山源へ看送る。

○廿四日。大ニひへる。しかし昨日ヨリ少しゆるむ。
ちんつき来り、五ツ比を四ツ過仕廻。代六百六十
三文相渡ス。山太上下地持参。藤作へ申遣し同人
よりよこす。昼比浅之助来る。昨日市川へも看送る。
主人諸方へ行留主中。藤四郎召状致来。其処へ岩
橋も浅之助相つれ入来り、幸ニ知らせ手紙書。主
人も帰り、梅本を酒肴持参。皆くよひ、うたひ
ヲうたひ遊ぶ。四ツ過比帰る。岩はしへ餅少く
送る。

○廿五日。天気よし。雪とけて下しるし。度々しくじ

る。藤四郎御作事見廻り役被仰付御勘定見習格被
仰付御足高拾二石被成下御銀其儘。当人宅せまき
ゆへ、此方へ客よぶ。熊ト小梅手つたふ。上田ヤ
九右衛門方へ料理申付る。客ハ十二人斗。ぬい
友とやらん云者ヤ其つれノ者来り俄、しかし是等
ハおそく来り大かた逢帰^(カ)りし跡也。家内皆よはれ
る。仁建も昼ハさうじ手伝ひ、八ツ比を九ツ比迄
小原へ行。昼過万吉寒見廻と礼とかねて来る。金
百疋、氷とうふ五十持参。ざうにして遣ス。

○廿六日。今日も寒し。主人田中へ行。留主中七ツ過
比野呂礼ニとて来る。昨日じゆどくづけ被仰付よ
し。田中を使来る。塩肴と酒、歳暮祝義。本ヤ鳥
あみかへしニ来る。梅花三枚送る。夜母君、梅さ
ぎの森ニ参る。白砂糖一袋田中へ持参。代三匁九
分。

○廿七日寄鶴杭千程有切可出題母君

○廿八日。快晴ス。主人かひ物ニ行、ひめち数十求。

雪太武足十卷匁。夕方、母君善之助の三太夫江行。
哥五十。

○廿九日。大晦日也。風呂たき朝ノ内すす私。昼比浅

之助来ル。半紙卷束、ちり同、酒券二持参。一寸

(破損)

□□ス。大ニ世話しく。主人、岩一郎、仁建かひ

物ニ行。足袋、草り杯也。そはやく立寄式匁斗入

用ノよし。小梅ハ宿ニ而八ツ比迄煮付物する。

扱、当年大ニ入用多く私方凡

入も考メ九百目余有

米ハ八拾二匁ニ私少々勘定して残り有しかし又私

ニ入ゆへ米与ニ而百目かる。